花蓮はこれまでの溜まっていた欲求をすべて
吐き出すかのように、隼人の体を執拗に貪った。

彼に向けられた猛烈な憎悪と再捜査への意志は、
快感に希釈されて蒸発してから久しかった。

すべては弟のせいで起きた「誤解」だったことが
明確になった以上、これ以上彼に拒否感を持つ
理由もなかった。花蓮は体力が尽きるまで彼の体を貪り、
悦楽を満喫した。

セックスを重ねるごとに、
彼に対する得体の知れない敬畏の念が芽生えていった。

それは、芽依が隼人に対する否定的な感情を除去し、
彼と長く交流するほどオキシトシンとセロトニンが
過剰分泌されるように脳を再構成したからだ。

いつの間にか花蓮は、
屋敷に入ってきた時の傲慢な口調はどこへやら、
自然と敬語を使うようになっていた。

何度食っても、全く飽きないマンコだな。
ククク……。

チュル…ふぅん♡
あ、ありがとうございます…♡

あの日以来、花蓮の体は落ち着くことがなかった。

一日に何度も彼のちんぽを
思い浮かべながらオナニーをした。職場でさえも。

職場でさえも。

欲情を抑えきれずトイレでこっそり
オナニーしているところを董に見つかったが、

董はたいしたことではないという表情で大丈夫だと言った。

いいじゃない。他の女警官たちも発情するたびに、
しょっちゅうやってるわよ。私もオフィスでたまにするし。

そ、そうなんですか…?

でも、オナニーばかりするのは良くないわ。
私が何のために『秘密の空間』を作ったと思ってるの?
欲情をなだめるには、男に勝るものはないわ。

花蓮は顔を赤らめた。
董はそんな花蓮が愛おしいというように、彼女の頬を撫でた。

そういえば、今夜うちの署の職員たちと
クラブパーティーに行く予定なんだけど、貴女も来る?

クラブ? どこですか?

隼人が運営している<u>売春クラブ</u>よ。
貴女が以前、摘発した場所のこと。

ええっ?! そ、それはどういう…!

驚かないで。貴女だって隼人とやることは全部やった
仲じゃない。何を純情ぶってるの?

あっ…！そ、それをどうやって…。

隼人のカルテルは今や、うちの署の心強いスポンサーになったのよ。
貴女の部屋に置いてあった贅沢品も、あそこからの贈り物よ。
これからは、そんな安物のおもちゃとは比較にならないほどの
巨大な事業に共に参加することになるわ。

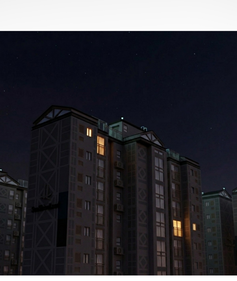
……

図々しくもカルテルと
結託して犯罪収益を図るという話をされているのに、
花蘭は何も言い返すことができなかった。

警察官としての使命や正義感よりも、

悦楽のパーティーに対する期待感が彼女を支配していた。

흡연세뇌 2



あ…

?

ええと……
署長から緊急の呼び出しがあって…
署に行かなきゃいけないの。

……

そんな格好で?

…!

してなかったメイクまでして。
怪しいな。

……

まさか隠してる彼氏にでも会いに行く…

そうだとしても、あんたには関係ないでしょ！

!!

…どうしたんだよ。

そんなに怒ることか？

あんたは…なんでいつも…！

……

...もういい。
やめよう。
!

余計な干渉はせずに
寝なさい。

펑
.....

……なんだよ。
急にどうしたんだ?

Boom♪
CLUB X
Boom♪
CLUB-X

Boom♪
Boom♪
はぁん♡

うぷっ…♡
ハムッ
チュル…♡

はぁぁ…♡
ふぅむ♡

아핫♡
팡
팡
하앙♡
いやぁ…
信じられんな…。

少し前まで
俺をぶち込もうと
躍起になっていた署長が、
팡
아핫♡
팡
俺にこんな
サービス
をしてくれるとは…。

ふふ…
ごめんなさいね♡
こんなに立派なモノをお持ちの
方だと知っていたら、
もっと早くから優しくして
差し上げたのに♡

하앗♡
꺼억
아앙♡
꺼억
하아앙♡

はうっ!♡
꾸욱
もう…!
そんなに乱暴に触り
続けるんですか?!
팟
팟
팟
ククッ!
悪かった、悪かった。
それで、弟と喧嘩して
気まずくなったって?
문질
문질
팟
팟
はぁ…♡
ええ…。
少し罪悪感が
あるんです…。
あんな風に言う
必要はなかったのに…。
余計な世話だ。

あいつは夫でもないし、
そもそもそんなことにいちいち
干渉するのがおかしいんだよ。

ふぅ…
そ、そうでしょうか?

それにしても…

貴方の
クラブに入るには、必ずこんな
破廉恥な格好を
しなきゃいけないんですか?

ああ。

それがここの
ドレスコードだ。

例外はない。

でも…
すごく恥ずかしい…。